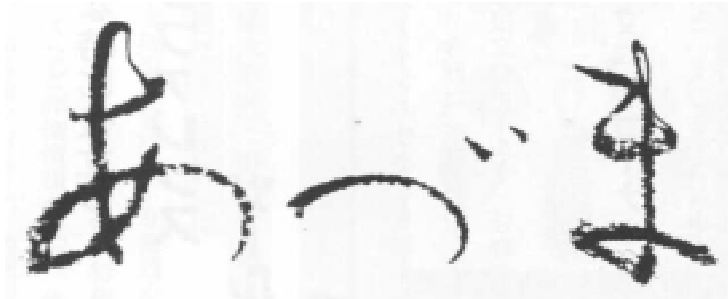


福島県立図書館報



第58巻（通巻262号）

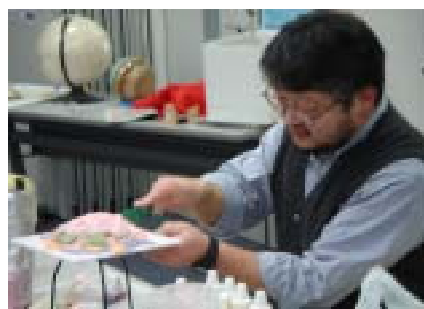
社会教育施設の連携について

磐梯山噴火記念館 佐藤公

福島県内には、数多くの社会教育施設があり、それぞれ独自に事業を行っている。最近、その施設間で連携する事業が増えてきた。一つのテーマについて、互いに資料を持ち寄ったり、人を派遣することにより、相乗効果が発生し、多くの来館者を集めることに成功してきている。

2004(平成 16)年、国立科学博物館から、猪苗代町にある国立磐梯青年の家(現在の国立磐梯青少年交流の家)で、「どこでもミュージアム・エコ in 磐梯」という事業を東京学芸大学と開催するので、連携しませんかと声をかけられた。今までにこのような経験がなく、最初は躊躇していたが、せっかくの機会であるということで、参加させていただくことにした。当館からは、磐梯山の噴火に関係するパネルなどの展示物を持参し、併せて『磐梯山は生きている』という子供向けの出前講座を実施した。この中で、立体地図を利用した泥流実験と、耐熱ガラスなべを使ってポップコーンを作る水蒸気爆発の実験を行ったところ、子供たちに大変喜ばれ、出前講座に自信を持った。

その後、郡山市ふれあい科学館から「100年前の実験に挑戦 石井研堂とその時代」というテーマで、5館(県立博物館・県立図書館・郡山市立美術館・ふれあい科学館と当館)による連携事業を実施したいという要請があり、国立科学博物館との連携事業に成功していたことで承諾した。5館連携事業を企画した岡田学芸員(現在、福島大学准教授)からは、様々な館が連携することで、一つのテーマが掘り下げられるし、各館の刺激となり、それがレベルアップにつながると教えていただいた。また、この中で県立図書館の方と知り合い、その年の11月には連携事業「科学実験と民話でふるさとの山を知ろう」の中で『ふくしま県の火山は生きている』を県立図書館で開催した。



成層火山のできかた実験中の著者

また、翌年には郡山市ふれあい科学館との連携事業「宇宙の火山・地球の火山」の中で『地球の火山』をふれあい科学館で実施した。

このような活動をいくつか実施する中で、受身の連携から自発的な連携へと意識が変化していった。県立図書館の菅野部長から会津図書館を紹介して



『ふるさとの山 磐梯山』(06.10.28)

いただき、翌年の読書週間には『ふるさとの山 磐梯山』を会津図書館で実施した。こういった連携事業の関係であろうか、県立美術館から要請があり、昨年秋の美術館の企画展「東北の風景」では、『風景としての磐梯山』というレクチャーをやらせていただいた。

私自身、この連携事業を通し、出前講座が当館の教育普及活動に、とても重要な位置を占めることを実感した。そこで、学校への普及活動も重要であると考え、昨年の12月には福島市にある県立盲学校での出前授業を実施した。障がいを持つ子供たちに、どうすれば火山というものを伝えられるか、最初は不安であったが、盲学校の先生方の協力をいただき、無事に実施することができた。今年は郡山にある県立聾学校でも出前授業をさせていただく予定である。

県内では、昨年度に県立博物館と若松城天守閣で、共同企画展「徳川将軍家と会津松平家」が開催されたり、県立図書館と県立美術館で連携事業「アートなおはなしかい」が実施されたりと、少しずつではあるが、連携が拡大してきている。また、来年度には、磐梯山噴火120年を記念して、4館(県立博物館・磐梯山慧日寺資料館・野口英世記念館・当館)の共同企画展「磐梯山」が準備されている。

今後、このような連携事業を各社会教育施設が切磋琢磨しながら開催し、多くの県民に受け入れられていけば、それが福島県の文化環境のレベルアップにつながるのではないだろうか。

佐藤 公 (さとう ひろし)

1956年、北塩原村に生まれる。神奈川大学経済学部卒。日本火山学会会員・日本災害情報学会会員。磐梯山噴火記念館に勤務して19年。火山防災や火山教育について研究中。

火山の恵みを通して火山に親しみ、その上で火山防災も考えるという教育を、地元の中学校をはじめ、年に20回ほどの出前講座で話している。現在郡山市に在住。

『磐梯山に強くなる本』(共著) 『1888 磐梯山噴火報告書』(共著) 『磐梯山の怒り 1888』(企画展図録)他